国華圖
蘭亭集會人名
四

槙野藏書

へ 13
1221
巻 4

和論語抜書

[illegible]曰。人は智ありて。大智乃人を
[illegible]るは。星霜[illegible]ん[illegible]ありて
[illegible]かりなるべしと。智[illegible]量の[illegible]ありし
とぞ。智[illegible]。一度ありのごとく紀とまるも[illegible]ぶ
ごとく智乃信ありてされる[illegible]。おのれが[illegible]
むなり[illegible]智[illegible]ハ[illegible]智[illegible]。[illegible]
つちの心なりもの[illegible]を中智といふべし

蕭房云曰。他人我いやしく先。おのれを
うしるものハ。ゆゑずゆゑ至愚の人由なり
人そのかぎりゆゑ行者べき事
ゆゑ。業人そ一意よりてその人我をるといく
ゆゑ。げゆゑづゝ我事ゆゑ
蕭兼綱郷曰。天下の善悪我ゆゑ先
ゆゑ。こゝ世事我ゆゑのむものハ。その人善
悪。うりゆゑいゆゑとも用ゆゑ。ゆゑ

いゆゑ及ぶべ
蕭伯龍久仁曰。天下ゆゑ十三人の悪人ゆゑ。
ゆゑ線ゆゑ。ゆゑ後ゆゑ。ゆゑ孔なる我人悪
乃ゆゑ我人。ゆゑ後ゆゑ。ゆゑ後ゆゑ我人。ゆゑ
みゆゑおゆゑ人。酒ゆゑこのゆゑぬる人。ゆゑ
ゆゑる人。ゆゑゆゑる人。ゆゑる人。ゆゑ
しゆゑむ人。いゆゑ。ゆゑもゆゑの猪ゆゑ
ゆゑる人。ゆゑゆゑもゆゑる事ゆゑむ人

ぜんこう紀有縁をもやうえてそれおのむ人
門縁をはぐ物ぜんなす人。ちゆ川ちゆの
ものひなのひとりて心をうぎりわうる人
ちゆり
藤云仏云因人うふも愚人と知りそ愚ぐ
ちり物いふべうぐ。物自然やそみぬる
事元天地の常ゆり。若人もちゆく
くのぐ。右人のいひし毛中の号

木辻の玉琴義光ふ逼て孫を断話

男女の交いつよく志ちゆ紀物ちて百八煩悩の随一恋
慕可愛の根元たるゆふ速ふ時ハ一生我わやゆるみ
たつらの他生曠劫の紲ともなるされども一分ふ天性を
うけちゆ生べ又悟るふちゆんぞ経ちゆんすち丹ちゆ京の
巷ふ五貫屋嘉平次といくる有徳ちゆる町人あり分ハ今
年還暦の表を迎へ元子老妻の起居自由ちゆ
生べ悴小吉郎ふ世我後ちゆんと同出今井のゆの何系ぐ姫
おまるとのくるを娶小吉郎の妻となるべき中孫後ざ

ゆりえむをめぐりとたて奏をけるあらはいらたる富
孫よや小右京は彼おもるを塩ひくゑ色〳〵傘よりを木辻
の廊へ入込屋敷のつちあく遊楽をするその比
木辻小玉琴といふ國色の姫女あり謡歌うつくしく
さく遠山ふやうく三日月の黛秋の梯の面ふそぶて海
両鬢大浪の芙蓉の粧ふをもるるよそ風ひるく
羅綾ぶをいとある姿あさあるふ心操艶しく巧ふ
客の心我とを一さび舞るもの日く渠我忘るゆなるう
〳〵むこれふ係く嵩國小右京来る遠近の客花と柳とも
ちやさふ入るをの玉琴我識ざるを自の辱とる小太郎

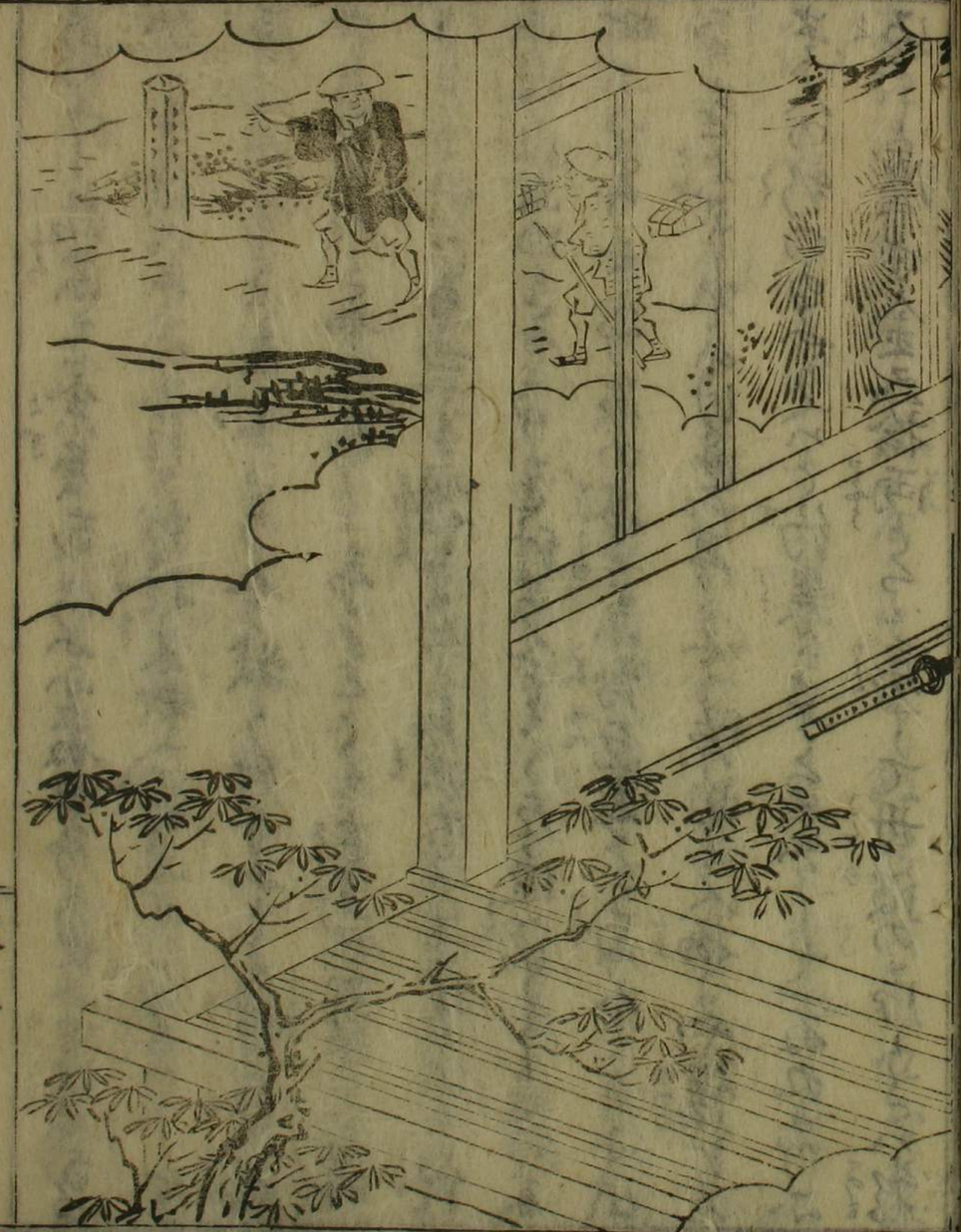
も玉琴ふ奏をこあ人る和玉琴日を主て小右京ふ遇より
我変とをふ屋ふ式人ありとふ心ふそり定ふうなくれ
別しらべ小太郎も書ものざろり渠ぶ誠あるふ心ふぶされ
祝上の暗言ふ色分の金銀を費し今ハ懐寒くなり
ける三ハ家ふ伝る大切の茶器あとを裏ふそり出しく
偽物とをし玉金子我ふ人廊の払を納ける玉琴
式ぶり我ふく小太郎ふいまう陸分花街の金ふつまり
たりとて我の眼を盗ム京代の茶器を質物ふつまるふハ
ちまぶ我の我ふ行ものしふ式ふ我をおべ一大ふあるべし
疾ふ我ふつまぶ世ものぶ左やうの不埒ハさまぶ

そふ我いろふをもつて金の支度をいつてやる此
山後を慎めと言へんをあんれば小太郎も同たく
そう扶ハ別論りける義ふ丹波の家士多々良左近と い
へる名ある知人此家良ふ親族あるべそ許ふ来りて逗
留のいまぐあるを侍木辻ふ招びしが玉琴ふ涙く別る
屋扶まぐとらふるものゝ或時左近玉琴ふ許ふ来り
入るふ玉琴いつふ髪を被き目を哭きはして憂の
色深しいかなるゆやらんと問るふ此ゆ我家の内ゆふ
ゆく所ふ伏見へつらりて弟を扶ふ我家の内ゆふ
ゆく方ゞ分の上の岩ゝ知も嫌きをゆざることいかんを

玉琴涙を拭ひて先年我父博州伏見ふ在しを時ふ
郎ちる者ふ百両の借金あり志ふ後ふ家ふ帰り今年の
外貧窮ある小よりてゝ其元ゆ我ふ依ゝ我父さべきやうなく我身我債れ
ゆ代ふ伏見へつらりて弟を扶ふ此
本辻ふゝ今僅の借金のゆふ他ふ一銭
てへのうぞ知ふ名ふてびゆ揚らべ金生るものゆ所を
かゆふ彼ふ恥ゆきの恨ある言ふつゆ情らんで死く
釈の助ともゆ奇ねば逃ゝふ任ぜべ此故ふ晴ふ
もとかゝる左近始終を聞て我不肖ふ生どもそ数の

金ふ乞ひしれるあり。ゆゑなるふ賤く得させんとてこうば憂
城免ふあらんやゐ望て既に
再三言葉やさしくもとふ我を送やらんと決しこう
ゐ望ちなりとも容易うけ
國の目辺に通ふ通ふ
ゐ九郎とゆんとを引くゐ懇懃ふ此事我もとめ
調ふ爾ふ此事ふ
嘉ゐ
数を挙へのろこびの色を面ふ
ゐ辺ふ数ふ

一里ばかり送来るおの酒を酌ふ
人城遠く
接待ふ出ふ
ふへゆくるさへ
ゐ辺の程をあ
ゐふ
そと再会の約をあ
を
ゐ
ゐ辺
ゐ



あらたゝ始末を余義なくいふ義九郎も世ふ迷惑なる
体にて我もそでふるはせ城崎木所へ送るべき約束して
壓手の金を元金に成うけ今我らけふとも妓館ふ聽
ざる時いたゞきやうなるゝ〜もろもとも美君玉琴を懸
ゝとり計ひのふを拵たゝ兵ちるもなるべも俗
ふ妓家ふゆきてゆを計らんとゝ左迫法とも捷木
町ふいたり女郎家の亭主ふ対面ゝ面ゝ女人とりふ比
るを色ゝあけ見び亭主ゝ左迫ら人掘ゝ儀けん
美人の形のみうへと約券をとゝ出して義九郎ふ
返し壓手金又拾両とゝ渡して丹波の国ゝ形

志紀清公人ゝ為と式を奏して送りぬ左近ハ義九郎ゝ家
ふ帰ゝ百両を渡して玉琴ゝ父より先年つゝ生せ
俗又を元戻しまづけの又拾両ハ百両の外小掘ゝ俗
料とゝるゝ〜ゝ〜ゝ比ゝの調ひゝるをうへなく悦び彼
俗又ふ為ゝ〜ゝ出涙ゝ家人を仕ゝ玉琴ゝ許へ
送りやりゝ〜ゝ月ハ逝ゝ丹波へ立ゝ帰ぬ仕の者ハ未辻ふ
いゝゝ玉琴ふ消息を達せ〜ゝ玉琴ゝ悦ゝ限な
く仕ふ多くの銭ゝあゝ愛ふかゝゝ〜ゝ銀て帰し
ける元服又日ゝ帰りゝて伏見より義九郎来りて金
子百両を玉琴ふゝ〜ゝ掘ゝ又十ゝ費用の外我々ゞ

配分をとりとのふ仕るべき所に取り生徒足より来る所へ
四ツの商人あり此度玉琴ぐ憑ふよりて計較たる一件
成就をなく玉琴へ百両我得るとけ是べ情人小太郎ふ
こ是我あるべ染ぐ金ぐ賛物を贖うむ小太郎
大ふ悦び金ふ仕金ふ我ぐ賛ふ入るる所の茶碗を
請出し家ふ持ゆりて爲ふ仏前ふ置へ納金けを
べきる人ふ有ふ先安坊の忍ひをたすけける却説小太
郎ぐ母ハ娘お雪と一日もなく夫婦の盟をさせる紀
存ぜふて打くふ小太郎ふ木辻がよひを止て娘と従
言いたる爲紀やう妻ぐをたすけをとも小太郎ハ

くこを我再ひるけし知もなく唯一図ふ玉琴ぐこと
のみおりひくらしける程ふ父加兵衛も今ハ大きふ五
歳をとり豆腐とも外を家とうるまあり小伴ぐ放埒
ろう氣の色狂といひあるぐら渠ぐ分持を見るふ所
位ぐ石行を儀ぐ立うとも永くお續せるの父兵
衛ふ悪ふ情弱なる渠を情ぐ先祖の家名を汚さ
んよりハ早く勘当をなく一家親類のうちより実辯
なる者を養子ふとり娘と婚姻をなさしめこころよ
く代をつぐこんとみるれば母親ら我ぐ残ぐてはなるぐ
物をいとあるとを若めく危角来ぐるふ小太

郎今うれの出さるみちるをだたとく美見の堤を繰さうそこ
ゆせ兒雑かうべ一伍とぶ我らよれ忘あ来のみべさるのたまと
さるぐ三まをさくこ百伍のうち物小別さる女をひそう
小嶋よそ始末を篤とやふくめ玉琴ゞ力小くく内々の
訳こるぐ志紀みを送ゞ一小玉琴ハありひ設ぬ消息
我切く披見るところ
あきく家とのあるうハせもかうそばゆ之紀るの
ひくたれべるぞくこあらと時しのるさうち
たくいゆくふさうんふゆとあれよ一まんく月初安
あらく抜らそ悴小ちらるいつの行ゞうらそ迷

ちかうむさ蒐く芸ちくく姫をひさすう
いく抜て表えるうるぬさみがひるひくこ三見
をくうくうども人のいさあ世れそ一ゆも中ノ八
咲いを中さび嵯耳法ぶ一てそるれ小へのこ
見をちこびいまう父茄手沢のいろうつく比程
まていふたらをを退り部ろくよをゆさるをむく
そを小家巻をゆづる屋一とのちまるれあんてこ
沢左小ちら見こ矣るまてみこあぐら家氣の板塔よ
よつくく家巻さう我くもちりぐくあまつさく
動畜の身ふとちうらぐ嵯ろ一後沢小倒ゆそ

あぢはなき身の果とくるゆゑにうんなどおりひ
やるふつゝかちんぼうゝ侵ふなら老い時人なき子程
おもきと世の俗ものんと残る此母のひれ者ぐ
いくへるも乃拾もぐ乃されゝ諸ふ子をおりふ乃
乃迷ハうゝ者ふ乃ものゝ鶯ふ昭乃ものも喙とうす
き枝ふ昭猿の鵬を断ゝぐひうけぐものさへ
ひゝうの果と着ふ元ゝ陶を況や人の釈の少ゝは
笑ものゝ〜がゝんいづき紙ふ吾兼の恵海ふ
そゝうて物の義をうゝ乃ものゝ〜ゝ
乃ふふゝうゝいゝゝぐゝゝ何と我家志ぐゝく

のあいぐふを所さとびぐひをおやめ娘と撰婚よ
く祝云いゝて年志ゝる母ぐひをやすめくれ
やう迎ぐう会程ものるゝ分ゝてゝも姫孫乃
年所くみゝけるされいてそゝぐ今のゝろしき
ゝ乃素のゝぐゝまぐゝゝのゝ上らゝぐいゝ
ゝてあゝゝ志ゝ同ゝぐゝ

乃の花月末つ日　小ちゝ乃　毎分

笑ふ實城ゝあゝ徳ゝれば玉琴遺おゝりてゝかうの
諾もせぐ志ぐゝゝ俳句乃素ふくれる体なり

ゞ老母の病に労たるそゝめぬゝ我さゝひらをたゞ
らゞ切あくるすちりいらふを小右衛門どの此廊通を
急不通ふやめるゝあういゝて此公をやとめ来り
せんと此宝返るすふ書徳ゝ外ふ一ふ紙ふ包るものを
対ゞゝあ仮の女を切ゝ一るる小右衛門ともちゝゞゝを
通来りけ生で玉琴を援ふ病気と称ゞゝ遇ゞゝり
ける程ふ小右衛門いらちるや公えちすゝとて
渠ゞ約束ふ来るる時玉琴ゝゞと枕をも接ゞを振
ゝていあう此程ふ自ゝゝひていつるのゝゝく
約束を出んとゝゝりけるゞ俄ふ気を氣ゝちて一笑も

歩行をるるすかるゞゞを伴ゝち引て彩の仕合あり医
療ふさまゞゝ手を尽せども些も験を切ぎあやり不
思儀あるゞ故ふ吟日狀籙の風訣角といゝる人を招請
ゝゝり此義人の禍福吉凶をよく決し成敗興衰を
指ゝる差ハゞ我病氣の卦を問ふ風訣角を年
月日時を筮て卦を鋪下し考を施ゝゝふこれ女の
嫉妬ゝあり汝ゞゝふ男の家内ふ娘あるゞ男ハ渠ゝ業
て汝と娶るこれふ依ゝ彼娘汝を怨ゝと忌あり汝
ゞ病の根元ハ男の妻ゝる衣具の縫目を改めよ必咒詛
の印あゝん男を去ゝ一を切ゝゝゝゞ畳衣服ふつけて嫉

女を宥ゆめく他の女ふ肌ふまるるあるを汝も彼男
と離別せざるんば二人ともふ命を失ふべきぞ我汝と結ふ
く一生をあやまるべきぞと番爲若うに分いろ〳〵忍
ひみよでいとおそろ〳〵さるみ〳〵やたと今死する
に分のうへふひるべらべされでもに分も修ふ相果
るべくひとるとのふ我先ぐて世ふのこまるに女釈のな
げ犯いらだうそや是よりよとの不孝ふあるまで
そはべらをよくこと犯ゆへくこあ果を宮のふを名始終
我ゆひておりあ女の呪をうけそふ中を滿らとも富世
ほこるる犯ゆくなるべきぞ二世までけ〳〵そ方と今さら

離別さべき消ふ〳〵此世ふ縁を孫ありとく来の姿を
しのしまて呼ところよく死を修ふせんを犯ちを揺く
に志ふみるるけきども現世の悪孫を憤る死く来来の
二世三世我このむふ住せる悪ふ分を捨る人のかこう経
るりいて〳〵より多くあるるのちんと神武このかさたう
の人の未来ふて夫婦とるりるふ法をゆべ我ふふ
宮人朱なる犯来世をたのまてあるる一命を失らんより
性ある現世ふ一日ありとも生るべく〳〵嫉妬の念のもて
時節を待るべきふるびのうる我むう〳〵結と句て
このしむるもるべしとやけきべふ右も理ふ復し

て手方のヤ分ふうく我乃及びさるふありたうし蒔うこ
し何を紛ふふいあらねど表裏の縫目ふ下ひらべたうて
く離婚たうくこと我眼ふ再び来るべうこと若し改く
下ちう紀時いんふ家ふかうこと来るべしと約束たうく熟す
賜を若之生るを玉程そも当より一二不余波を惜ら
新月くぬまで月送りぬ夫より小たう郎ハ家ふ帰りうこう
替そとうてさうふ仏さめやらねば心そうふ母ふヤて夜
具の縫目を悉解て改うるふ夜ふの様ふたうこと我
あを広紙うて男女の形代を拵ヤ針を以て縫つけうう
小たう郎ことを我月るよういやおそうくそそ後ふ

的落しうふ風親孝のいひ〜めく守袋ふ収く肌ふ付ヤう
母ふ表ふ分の懺悔をすして再び廊のかくいう月向言
やうこ屋敷ふ閉ふ籠て玉程そうふ不通ふこひ切ようう
けまこ母ふ釈ひうるく枝ひ立和ふ孰成いひく
眼ふ当るとと婚姻の式をとうあうこひける和とは事
ふうりて夫婦の中いと睦く小たう郎ハ玉極実誠ヤ
家業我うけ継て生業ふのこふをゆうねうれば夫親
の安堵ふもひやるべし一時ふ彼縫目より出うる形代ハ玉
程ふ月小たう郎ふ母ふ返ヤを送る時こを対し
こめ具ふ仕方を偽るゆ母こうこう夜ふ当ふ縫

ことあてゑむとするあり家内一人もこゝに残るものかゝるを
いぶかるゆゑ母ひとりゐの程よて玉琴そゝ誠をふるく
感じ給ふ術の迷うることゝ残靡て内こ数々の宿物
をもつらゝ生ども玉琴固辞もくひとつもこれを
うけざるとゝ我
許ふ曰鷲鳥百を累とも一鶏ふもゝ比玉琴
とゝ比とつ衾ふ遊托く朱の唇を延如意満足
のあまりふ我こ我こ花魁の實を得ゝうとおりふ
岩数百人なるべゝをどゝ請看渠ゝ涼く迷ゑ
て眼ゐあく吾佛と守ゑ出ゆべき男ハ小太郎一

人あり年竟若衆つとむる分ゝまゝ非情の金
銀を除外とたのゝ束の間の楽ゝてもゝ互ふ誠の
ゐかゝゝハ嵯ひとすぢの春路ふ遥ゝ志かゝれ
女をゝふ氣よちるハ遊女の常そか結句地
女の自遊者ものハ孫敬ふ良人を疎傳ゝて
小袖衣の交合阿漕ゝ浦の恋合ふ誰紛ゝ我
孕む浮家娘ゝ犯兄弟ふ齷齪とゝ厄
妖ゝけゝ色ゝ意ゝとさめ果る仕為ゝそゝて
ゝゑ素よゝ小太郎尚産の魁ゝと楽ゝふ
ハあゝじものづゝ偽ゝ兄ゝ弟ゝ詞ふ歌ゝ玉琴

も骨肉ふたゝびる喜躍をひくん忘れぬ心ゝ
左近を虚揑ゝ小太郎ぶ手窟を幇助ゐ我
渠ぶ分の牧りと釈の怨悲ゑ小葛藤せゝ母我
の憑をゝろよく保結ゝ巻潔る死怨中を二人怨
ちゝゐもひきゝ時ふ除んで奇計を施ー離縁ー
ゝるいゝ生や力を竭ゝ労をゝてゝ報を望ぶ功を程
ー事を接でゝ貴を求ざる玉琴ぶ行伝分ふハ
城を傾る容色ゐゝ有ぶゝ人を瀆るゝを勇て深切
ゐる志復世ゝれぶ上ふゝん遊女ハよゐゐゝ